

Title	<研究論文>理想の自己像とメディアにあらわれる人物像 : 自己像形成におけるメディアからの影響の重要性について
Author(s)	家島, 明彦
Citation	教育方法の探究 (2004), 7: 65-73
Issue Date	2004-03-31
URL	https://doi.org/10.14989/190291
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

理想の自己像とメディアにあらわれる人物像

—— 自己像形成におけるメディアからの影響の重要性について ——

家 島 明 彦

1. はじめに

個人の理想と生き方に影響を与えたものは何か。何が今の自分をつくりあげてきたのか。

そこには自分以外の存在＝「他者」¹が深く関わっている。心理学においては、家族、友人、教師といった「身近な人物」からの影響（あるいは身近な人物との関係性・相互作用）が考えられてきた。だが、自己は決して身近な人物からの影響だけで形成されるものではない。心理学において、「身近な人物以外の他者」²からの影響（関係性・相互作用）については、研究が十分になされてこなかったが、マス・メディアが発達した現代において、人々は幼少期から大量かつ多様な情報に接しながら成長しており、「身近な人物以外の他者」、特にメディア³からの影響は大きいのではないかと考えられる。

しかし、メディアからの影響について扱った心理学研究はほとんどない⁴。メディア自体をテキストとして扱った研究は存在するが、自己形成の文脈においてメディア（あるいはメディアにあらわれる人物像）からの影響を扱った心理学研究はほとんど見られないのが現状である。

そこで本稿では、自己形成において重要とされる接近・回避の目標としての自己像（理想の自己像）が、何（誰）を参考にして、どのように形成されていくのかに焦点を当て、自己と他者、特にメディア（メディアにあらわれる人物像）との関係について考察する⁵。

2. 自己形成におけるメディアの重要性

(1) 自己形成における他者としてのメディア

一般的に、人々はあらゆる経験を通して自分以

外の存在＝他者から影響を受けている。「○○に憧れてこの道を選びました」という表現や、「生き方モデル」という言葉からも、（自己実現や生き方選択など）自己形成に他者が深く関わっていることが容易に想像できる。

我々は生まれてから様々な経験を蓄積するが、それが我々の自己に意味を与えているのであり、我々は経験によって自己を形成しているといえる（水間、2002）。そしてその経験とは、本人だけで成り立つものではなく、その人を取り巻く全てのものとのかかわり、すなわち（自分以外の存在としての）他者との相互作用なのである。自己は他者との関係のなかで発展するものとされている（Mead、1934など）。また、他者を観察したり模倣したりすることによって自分の中に他者を取りこみ、「内なる他者」としての自分が生まれることが、自己の二重性による自己意識の成立の契機だとされている（Wallon、1946など）。その他多くの学者が自己形成を他者との関係から研究してきた。自己形成には他者が必要であり、自己も他者の存在があってはじめて確立されるのである。他者の存在が契機になって生じる社会的学習についての心理学研究も多い⁶。

このような自己形成における他者の重要性については自明のことであるが、これまで扱われてきた他者とは、ほとんどが「身近な人物」であったように思われる。自己形成の研究においても、これまで「身近な人物」との研究が中心で、メディア（にあらわれる人物像）との研究はほとんどなかった。しかし、メディアが生活に深く入りこんでいる現代社会においては、人間との関係だけでなく、メディアとの関係、メディアにあらわれる

人物像からの影響についても研究していく必要があるだろう。

(2) メディアの影響可能性

メディアには「一方向的」、「間接的」、「非現実的（架空）」なイメージが含まれる。一方向的関係は双方向の関係に劣る、メディアを通じた間接的な関係は身近な人との直接的な関係に劣る、架空は実在に劣る、という意識がなかっただろうか。我々は直感的に「双方向>一方向」、「直接>間接」、「現実>架空」と考えがちである。しかし、自己形成（個人内変化）においては個人内の意味づけが最も重要である。例えば、それがたとえ遠くから見つめるだけの一方的な片思いであっても個人の中で恋愛の反応が生じ、自己は変化していくように、「双方向 or 一方向」といったことは関係なく、双方向であろうと一方向であろうと自己形成は起こるのである。片思いの時と両思いの時で恋愛の反応の質が異なるという指摘は、ここでは重要でない。ここで重要なのは双方向的であろうと一方向的であろうと変化が起きる＝自己形成が行なわれるということである。個人内の意味づけ、重みづけによって、双方向的なものより一方向的なものの方が本人に強い影響を及ぼしている場合もあるだろう。同様に、「直接 or 間接」、「現実 or 架空」に関わらず、自己形成が行なわれることがいえる。自己形成において重要なのは本人が受けた影響の強さ、本人にとっての意味である。すなわちメディアも身近な人物に等しく自己形成への影響力を持つ可能性があるといえる。

現代の日本においてはメディアの発達・普及が著しく、幼少期からあらゆるメディアにさらされる。現代において子どもがメディアに接する機会、時間は確実に増えており、メディアが子どもに与える影響についての関心も高まってきている。小児医療の現場や、脳科学研究の分野などから、過剰なメディア接触が子どもに与える「懸念すべき影響」についての報告が相次ぎ、「子どもとメディア研究会」の調査（2002）で、小・中学生の映像メディアへの接触の実態が明らかになった。その

結果、9割以上が食事中もテレビをつけていること、1日3時間以上テレビを見ている小・中学生が5割以上であること、さらに、これとは別にゲームやインターネットといったメディアへの接触時間があることなどが示されている。また、テレビ・ビデオ育児やテレビ文化の中で親子が目をあわせて共感する体験が非常に少なくなり、「テレビ・ビデオ育児症候群」という現象が起きていることも報告されている⁷。

このようにメディアによる悪影響を懸念する動きがある一方で、メディア経験を自己形成的契機としてポジティブにとらえようとする研究もある。佐々木（1996）は、自己形成的契機としてのメディア経験を論じ、メディア経験は単に視覚的・聴覚的なものにとどまるものではなく、何らかの次元で人間の想像力と関わる経験であると述べている。また、メディア概念を身体的経験と関連させながら、装置メディア、電子メディア、双方向的メディア、会話型コミュニケーションというように、何段階にも分けて論じ、メディアの細分化の必要性を指摘している。

(3) メディア（にあらわれる人物像）からの影響

従来の自己形成の研究は、自己や理想像が“どのようなものか”“どのように発達していくか”という研究がほとんどであり、影響要因については、親をはじめとする身近な人物に留まっていた。あるいは、メディアの影響を示唆しつつも、それに焦点が当てられることはほとんどなかった。心理学以外の分野、例えば教育の分野では、理想や夢、望む生き方を持つことは子どもにとって重要なことだというスタンスから、子どもの理想・生き方に影響を与えるものが何かという調査が行なわれている。

井上（1994）は、書物からの影響を検討していく中で、「知識が身につく」「心が磨かれる」「ものの見方や考え方がしっかりする」などの理由で本を読む子どもは全体の1割にも満たないと述べ、何かを得るために読むという教養小説的な読み方は、大人になってからのものである可能性を示し

ている。また、平成5年の「中学生の読書観」というアンケート調査をもとに、漫画や雑誌を含めた書物（特に漫画）からの影響を検討している。人気の高い漫画の共通性が「主人公が様々な困難に立ち向かいながら徐々に成長していくストーリー展開」であることを指摘し、また「困難を克服しながら成長する主人公の記録」という点で同じ構造をもった教科書教材の「走れメロス」（太宰治）にも子どもが惹かれることから、漫画であれ小説であれ、人物像の変化の明確な物語を子どもは好んで読むことが指摘されている。さらに井上は、子ども達が書物からの影響を自覚しているかどうかを検討し、その結果、自分自身に影響を与えるものとして、一番多く挙げられたのは「友人」（6割）で、次に「テレビ」（4割）で、「書物」はわずか4%であったと報告し、子ども達が意識的に「生きるヒント・知恵」を書物から得ようとしているのではなく、無意識的に影響を受けていることを指摘している。また、アンケート調査に含まれる「読書があなたの将来の生き方により影響を与えますか。」という質問項目に対しては、「はい」（37%）、「いいえ」（10%）、「わからない」（50%）という回答結果が得られたとも報告し、子どもが読書からの影響を意識していないことを示している。そして、子どもが漫画から人の生き方の何を学ぶかとして、第一に「カッコよさ」（困難に負けずにいつも前向きに生きる姿）、第二に「物事を多面的に見る視野」であると述べている。子どもは主人公が苦難を乗り越えていく過程で大きく成長していく基本構造に深く感動することが示唆されている。また、子どもは書物から「人の生き方」について自覚しておらず、一見影響を受けていないかのように見えながら、実際は大きな影響を受けている、ということも示唆されている。

速水（1993）は、深く感動して心に印象強く残り、生活の励みになっているような話や言葉の出所を、「家族、先生、友人、本・新聞・テレビ（マスコミ）、その他」に分けて質問したところ、中学生、高校生、大学生ともに「本・新聞・テレ

ビ」が一番多かったことを報告している。特に大学生の場合は「本・新聞・テレビ」の割合が6割以上（男子71.4%、女子59.1%）であった。速水はこの結果について、テレビ、新聞のみならず、雑誌、漫画、小説、映画、歌など多くの媒体が含まれた可能性を指摘している。思春期以降、一般的に身近な人よりもメディアからの方が感動（影響）を受けやすいことが示されている。

ベネッセの調査（1995）が、高校生に“「同じような行動や生き方をしてみたい」と思った人”を3人以内でたずね、本人との距離の点から、(1)家族・親類、(2)友だちなどの身近な人、(3)スポーツ選手などのその他の実在の人、(4)実在でない人、に分類した結果、子どもたちの生き方のモデルは、マンガ・アニメの登場人物（36.5%）が最も多く、全体の3.5割を占め、次いでスポーツ選手（26.8%）、学校の友達や先輩（20.6%）が2割台であった（大野、1995）。このことから、身近な人よりむしろ実在でない架空の人物やテレビで見ただけの有名の方が生き方モデルとして選択されていることがわかる。メディアにあらわれる人物像が生き方のモデルとして選択されていることから、メディアにあらわれる人物像が自己像（理想像）に影響を与えていることがわかる。しかし、自己像（理想像）とメディアの関係を扱った心理学研究はまだまだ少ない。

3. 理想像（理想の自己像）について

(1) 身近な人物からの影響

メディア（にあらわれる人物像）からの影響について述べたが、身近な人物からの影響については心理学の研究も多い。しかし、大抵その時の他者は直接的な関わりを持つ身近な人物である。例えば、同一化（同一視）の対象は必ずしも自分と双方向的関係である必要は無く、こちら側の一方的な憧れなので、身近な人物以外（例えば、アイドルや有名人、TVアニメのヒーロー・ヒロインなど架空の人物）が対象となる可能性が十分あるにも関わらず、心理学研究として報告されているものは、親などの身近な実在の人物を扱ったも

のがほとんどである。

身近な人物からの影響を間接的に示す具体的な心理学研究の例を挙げると、例えば、他律的なものから自律的なものになっていくという道徳性(善悪の基準)の発達に関しては、幼児期は親などの権威という外的拘束として与えられていたものが、友人・仲間との協同活動を通じて道徳観が形成されるようになると論じられている(Piaget, 1932)。つまり、道徳性は、はじめ親・教師(という他者)からの影響によって発達し、後に友人(という他者)からの影響によって発達すると解釈できる。道徳性はやがて価値観、理想像とも結びついていく。伊藤(1994)は、「自己概念形成の基準となる“規範意識”を“自分に対してこうあるべきと考える期待や願望”と定義するとすれば、この意識は“理想像”として具現化されることになる」と述べている。理想像として具現化される規範意識⇨道徳性は他者の影響を受けて形成される。すなわち理想像も他者の影響を受けて形成されているものであることが推測される。

理想像に影響を与える他者は、同一化(同一視)の対象⁸や「生き方モデル」⁹としてこれまでの研究や文献に見られる。子どもの社会化にとって親への同一視は重要な役割をもつと考えられており、男女ともに人格面で親から影響を受けていることが示されている(小西・山本、1978など)。また、高校生を対象にしたベネッセの調査(1995)は、生き方モデルがいる生徒のほうが、いない生徒より自分の考えを持ち、将来やりたいことがあるという結果を報告し、生き方モデルの存在が将来像や自我を作る上で重要であることを示唆している。

理想像や生き方に対する親や教師の影響を示唆する先行研究を紹介しよう。吉田(1994)は、いくつかの例外を除けば、家庭で子どもたちの生き方に最も影響を与えるのは親だと述べ、教え子の事例から、子どもが親の考え方を受け、知らず知らずのうちに親の望む方向へ進もうとしている可能性があることを指摘している。また、勝本(1997)は、小学5、6年生を対象にアンケート調査を実施し、「『りっぱだな、そんけいできるなあと、

思う人は誰ですか?』(昔の人でも、今の人でも、遠くの人でも身近な人でも構いません)」という質問に親(両親、父または母)を挙げる者の多さを指摘している。尊敬は価値を認める行為でもあり、尊敬の対象が理想像に影響を与えていることも十分考えられる。また、1999年の麻布台学校教育研究所の調査においても、子どもたちが予想以上に大人に注目し、自分の生き方モデルとしていること、特に父親の存在感がかなり大きいことが示されている。

また、ほとんどの場合、子どもにとって親の次に接する機会が多い大人は学校の教師である。関根(1997)は「映るとも思わず 映すとも思わず 映る月と水」という柳生新陰流の極意歌を紹介するとともに、教師は自分の生き方が生徒に影響しているとは思えないし、生徒もまた自分がその教師の影響をそんなに受けているとは思ってないが、教師の人柄は何らかの形で生徒に映じているとして、自覚されない教師からの影響について述べている。速水・高村・陳・浦上(1996)は、「教師から受けた感動体験」を調査し、生徒が教師の日頃の姿勢・態度、教師の思想や生き方から影響を受けていることを示している。

(2) 理想像の捉え方

理想像が重要となってくるのは、他者をそのまま自己に取り入れて同一視する段階と、他者を参考にオリジナルなアイデンティティー(自我同一性)を形成する段階であると考えられる。

古くは19世紀末にアメリカとヨーロッパで青少年が描く理想像についての研究がなされている。子どもが描く理想像についての研究はそれ以後もアメリカやイギリスにおいて続けられ、多くの理想像テストが実施されてきた。これらのテストの背景には、①青少年は自分が抱く理想を人格化することによって、それを表現することができる、②青少年は魅力的な他者を偶像化し、その人の影響を受けることがよくある、という2つの仮定があったとされる。②については多くの学者が言及している。いくつかの研究は、青少年が特定の他

者モデルを挙げずに理想像を述べたり、モデルに自分自身を挙げたりすることを報告し、青少年が「特定の誰かのようにになりたい」と思っていないことを指摘しているが、これは他人をそのまま内在化しようとするような同一視から抜けだしつつある状態と、自分を拠り所としたアイデンティティーをある程度確立できている状態を示していると考えられる。もともと無意識的に生じる同一視ではあったが、アイデンティティーを確立していく（自らの意識が強まる）段階に入って、他者からの影響は、ますます自覚されにくくなるのが推測される。Erikson (1959) が、同一化 (identification) の対象が増えていき、それが整理・統合されて同一性 (identity) となるとしていることから、アイデンティティーや理想の自己像 (理想自己) にも他者への同一視の影響があることが考えられる。すなわち青年期においては、望ましい他者 (全体) をそのまま取り入れるのではなく、望ましい他者の部分的要素を自らに取り込むようになると考えられる。だが、青年期における理想像に影響を与えたものを特定するのは極めて困難である。なぜなら、理想像に影響を与えたモデルは複数である上に、取りこまれるのは部分的なものだからである。さらに一旦他者から自己の中に取りこまれた他者の部分的特性は、その帰属が他者から自己へ移る (自己のパーソナリティとして認識され、もはや他者のものではなくなる) ため、本人が最初から持っていたかのように錯覚してしまうことも考えられる。複数の同一化の対象が複雑に整理・統合されて同一性を形成していった過程を調査するには、無意識的な部分を意識化させなければならない。巧妙なアプローチによる詳細な分析が必要であろう。

日本においても理想像に関する文献は数多くあるが、同一視の対象としての理想像と同一性 (アイデンティティー) の形成段階における理想像の区別ができていないように思われる。津留 (1962) は、子どもの描く理想像をどのようにしたら客観的に捕らえることができるかを検討する中で、理想というような言葉は個人が生活目標を持って意

志的に生きだしてから初めて用いられるべき概念であり、子どものように毎日の生活に没入して生きている時期にはまだ本当の意味では生まれていないはずであり、従って本当の意味の理想は青年期にならなければ生まれてこないであろうと述べている。また、本当の意味での理想はまだ子どもの中に確立していないにしても、子どもが漠然と、あるいはその場的に、「こんな人になりたい」とか「こんな生活をしたい」という望みを持ち、その内容や性格が文化的、教育的に規定されている可能性を指摘している。ここでいう子どもの描く理想像とは、自己像に重ねられてはいるが、憧れの対象のことであり、他者のことである。そして、青年期において生まれてくるという本当の意味の理想 (像) とは理想自己のことである。前者は自己像に重ねられた他者像であるが、後者は他者像からつくられた自己像である。前者はまだ「あの人のようになりたい」という意識が覗えるものであるが、後者は既に複数の他者像を整理・統合して自分のものとして確立しているものであり、「こういう自分になりたい」というものである。理想像をとらえようとするならば、この2つの発達段階における異なる理想像の違いを意識しておく必要があるだろう。

理想像の本質は憧れであり、その人が切望しているものを持った人物像に投影された個人の願望のあらわれでもある。青年期の理想像は主に理想自己として研究されている¹⁰。伊藤 (1994) は、人格形成の過程を社会化と個人化の2側面から見る視点から、理想像にも社会への適応を方向付ける“社会的理想像”と、個性化を方向付ける“個人的理想像”の2種類を想定している。個人の理想をとらえる際には、このような側面の違いにも留意が必要であろう。

4. マンガというメディアについて

(1) マンガの影響可能性

これまでメディアが理想像に影響を与える可能性について述べてきたが、ここでひとつのメディアを取り上げることにする。そのメディアとは、

「マンガ」¹⁾である。1960年代、大学生がマンガを読んでいることをマスコミがはやし立てた時代があったが、今やマンガは文学作品や映画のように文化として扱われている（宮原、2003）。また、日本の少年・少女向けマンガは世界各国に翻訳されて輸出されて人気を集めており、マンガは国際語“MANGA”として世界的に認知され、浮世絵に次いでよく知られる日本の代表的文化として、ますます成長を続けている（清水、1999）。

小さい頃からTVアニメやマンガを見て育った人々にとって、マンガから受けた影響は大きいと考えられる。先述のとおり、ベネッセ（1995）の調査では高校生の“生き方モデル”はアニメ・マンガの登場人物が一番多かった。また、近年では犯罪を起こした少年が、マンガやアニメのことを供述するといった報道も耳にする。マンガの表現が子どもには過激過ぎで、性と暴力の原因になると問題になって規制されたこともある。このようなメディア規制は、メディアからの影響を認めているからこそ行われるものであり、規制が入るマンガにおいても同様に（少なくとも子どもに対しては）影響力を持つことが暗に示されている。マンガは多様なジャンル、多様な主人公、多様なストーリーを有することから、自分に引きつけて読みやすい。また、映画・美術・文学の表現手法を取り入れたことによるストーリー展開の明解性と娯楽性を有し、活字と絵を自分のペースで行き戻りできる極めて特殊なメディアである。マンガは青少年の自己形成に影響を与えている可能性が最も高いメディアのひとつだと言える。

（2）日本における大衆文化としての漫画

清水（1999）によれば、現在のマンガには、江戸時代の「鳥羽絵」→明治時代の「ポンチ」→大正・昭和戦前期の「漫画」→昭和20年代の「絵物語」→昭和30年代の「劇画」→昭和40・50年代の「コミック」→昭和60年代・平成の「MANGA」という歴史がある。清水は大衆性をマンガの特徴とし、18世紀初頭、江戸時代中期に大阪に登場した“鳥羽絵本”と呼ばれた戯画本を最初の大衆マ

ンガとしている。マンガは、映画・文学・美術の表現手法を取り入れながら、その内容を政治諷刺→娯楽→ストーリー漫画と発展させ、近年ではキャラクタービジネスという巨大産業を支える存在になっている。以下に清水（1999）のマンガの歴史をごく簡単にまとめる。

明治時代、新聞や雑誌といった近代ジャーナリズムの中に発表の場を得るが、鉄道網の発達によって全国で同時に人々の目に触れることが可能となり、さらに大衆化が進んだ。人間性を諷刺するストーリー漫画なども生まれ、ポンチ本と呼ばれる時局諷刺画がブームになり、日露戦争期まで続いた。当時これらを書いていたのは浮世絵師だった。大正末期になると、新聞の4コマ漫画が登場し、ストーリー漫画が急成長する。この頃、紙芝居的文章の表示から、現代の漫画に使われているような吹き出しの形でコマの内にセリフが取り入れられるような漫画表現が成立した。当初は諷刺が盛んだったので言論・出版に対する政府の圧力があった。昭和戦前期には質の高い子供漫画が誕生したが、戦争によって、子供漫画も戦争遂行のキャンペーンに利用されるようになり、翼賛漫画と呼ばれた国策協力漫画が次々と製作された時代でもあった。昭和30年代は戦後第2の漫画ブームの時代であり、貸本屋の出現によって漫画の読み手が高校生、大学生や働く若者にまで増え、サラリーマンをターゲットにした漫画がよく売れた。週刊少年漫画誌が創刊されたのもこの頃であり、青年漫画の出発点となった『ガロ』が創刊され、文学的感覚を多分に持ち合わせた作品で大学生の心をつかんだ。昭和40・50年代になると、昭和30年代の貸本漫画から生まれ、新時代のストーリー漫画の呼称として定着した「劇画」に代わり、「コミック」という言葉が頻繁に使われるようになった。また、青年漫画誌が登場し、コミック・マーケットが形成されるようになった。高度経済成長を遂げた日本において、週刊誌の主要読者はサラリーマンだったので、様々なタイプのサラリーマンを主人公にした漫画が増え、職場内での人間関係などを題材にしたものがあらわれた。『巨人の星』といった

“根性”ものがヒットし、『ベルサイユのばら』のような強いヒロインが登場する一方で、頼りない男性も漫画の主人公として描かれ始め、様々なヒーロー・ヒロインが誕生した。昭和60年代・平成の時代になると、漫画は巨大ビジネス化した。コミック誌のヒット漫画は単行本化やテレビアニメ化されることが常識となり、これによって更に多くのファンを獲得し、知名度と人気度を増したキャラクターが商品の販売促進に利用され、そこに版權使用料として莫大な金額が動くキャラクタービジネスが形成された。また、教養書のコミック化が現れ、多忙な現代人の知識吸収のスタイルにマッチして成功した。

日本のマンガは世界に輸出され、アジアや欧米で人気を得ている。漫画という表記からマンガという表記が増えてくるが、これらにはアニメやゲームも含まれる。この言葉は「MANGA」として国際語になっている。日本のテレビアニメは1980年代に世界中で放映されるようになり、ジャパンとアニメーションの複合語としての“ジャパニメーション”という言葉も生まれ、世界中に日本のテレビアニメ人気を巻き起こしている。マンガは巨大産業となり、毎年20億冊を超えるコミックが刊行され、アニメやキャラクタービジネス、ゲームソフトやマンガ喫茶など関連産業の売上は数兆円にまで達するものになったといわれる。

(3) 文化としてのマンガ

日本においてマンガ＝“オタク”、“幼稚なもの”といったネガティブなイメージがあるが、海外においてマンガは文化として評価されており、日本も近年その傾向にある。フランスやイギリスではマンガも芸術として認められており、イギリスでは優れた漫画家にはサーの称号も与えられるという。また、韓国では国を挙げてのアニメ大国化政策が行なわれている。韓国政府は文化産業を21世紀知識基盤産業の核心産業として育成するため、韓国文化コンテンツ振興院を設立し、そこにアニメ支援室を設けた。隣国が国を挙げてアニメ文化大国を目指す中、日本政府におけるマンガの評価

は消極的といえよう。

しかし近年、日本でもマンガというメディアを文化としてとらえる動きがでてきた。2000年に文部省が発行した「教育白書」によると、漫画は「日本の文化」であり、「重用な現代表現」と位置づけられた。その理由として、マンガが出版物の4割を占めたこと、海外での高い関心と評価、国内外での展覧会の開催、大学での研究対象としての広がりをあげている。しかし、日本政府が認めたのは、あくまで「大衆文化」としてのマンガであり、芸術として高く評価されているわけではないという指摘もある（小山、2002など）。一方で、文化庁メディア芸術祭にはマンガ部門およびアニメーション部門が存在しているし、2000年4月には京都精華大学の芸術学部日本初のマンガ学科が設立された。東京大学が2004年秋からアニメのプロ養成のための教育プログラムを予定するなど、マンガは芸術・文化として社会的にも評価されるようになってきている。

5. まとめ

以上、自己形成においてメディア（における人物像）が自己像に影響を与える可能性、他者像からつくられる理想像、マンガというメディアについて述べてきた。その結果、メディアにおける他者像の部分的要素が自らの中に取り込まれていき、他者像の整理・統合の結果として理想の自己像（自己の価値観・行動様式）ができあがっていくという自己形成過程が考えられる。また、日本の大衆文化として世界に知られるマンガは、国内でも文化・芸術として認められつつあるほど普及しているメディアであり、多様なヒーロー・ヒロイン、人間関係を描いていることから理想像に影響力を持つと考えられる。これらのことから、マンガというメディアにあらわれる他者像の価値観や行動様式が、理想像の中に組みこまれ、個人の価値観や行動様式に影響を及ぼしていることが推測される。この仮説検証および具体的な影響の検討、個人にとっての意味づけなどを今後の課題とした。

参考文献・引用文献

- Erik, H. Erikson. (1959) 小此木啓吾 (訳) 1973 『自我同一性』 誠信書房
- 速水敏彦・高村和代・陳 恵貞・浦上昌則 1996 「教師から受けた感動体験」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』43 51-63頁.
- 速水敏彦・陳 恵貞 1993 「動機づけ機能としての自伝的記憶」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』40 89-98頁.
- 井上敬夫 1994 「書物からの影響を検討する」『現代教育科学』37 (7) 32-35頁.
- 伊藤美奈子 1994 「理想像の分化と内面化に見る非行少年の心理的特徴」『教育心理学研究』42 (2) 363-372頁.
- 時事通信社 1999 「存在感大きい父親-自分の生き方のモデルに (麻布台学校教育研究所が調査研究報告)」『内外教育』(通号5036) 2-3頁.
- 勝本百男 1997 「子どもの理想は像を結びにくくなっている?」『現代教育科学』40 (3) 69-72頁.
- 子どもとメディア研究会 2002 『子どもとメディアいま大人たちがなすべきことは?』 子どもとメディア研究会
- 小西勝一郎・山本みずほ 1978 「親への同一視について-親の態度、子の性格との関連-」『大阪市立大学生活科学部紀要』26 179-191頁.
- 高校教育研究会 (代表 深谷昌志) 1995 「第5章 高校生の生き方のモデル」『モノグラフ・高校生 volume 44 高校生のヒーロー観』ベネッセ教育研究所 60-79頁.
- 小山昌宏 2002 「ジャパン・ポップに覆われた世界-Jコミック・ジャパニメの体制内化と世界戦略」『社会文化研究』5
- Mead, G. H. (1934) 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) 1973 『精神・自我・社会』 青木書店
- 宮原浩二郎・荻野昌弘 2003 『マンガの社会学』 世界思想社
- 水間玲子 2002 「自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題-個人の主体性の問題-」『京都大学大学院教育学研究科紀要』48 429-442頁.
- 大野道夫 1995 「望む-“生き方のモデル”の現在」『児童心理』49 (12) 127-130頁.
- Piaget, J. (1934) 大伴 茂 (訳) 1956 『児童道徳判断の発達』 同文書院
- 佐々木英和 1996 「メディア経験と自己形成的契機」『東京大学大学院教育学研究科紀要』36 475-484頁.
- 関根正明 1997 「生き方のモデルとしての先生」『児童心理』51 (12) 23-31頁.
- 清水 勲 1999 『図説 漫画の歴史』 河出書房新社
- 津留 宏 1962 「子どもの描く理想像とそれを規定するもの」『児童心理』16 (3) 312-317
- Wallon, H. (1946) 浜田寿美男 (訳編) 1983 『身体・自我・社会』 ミネルヴァ書房
- 吉田高志 1994 「家庭からの影響を検討する」『現代教育科学』37 (7) 26-28頁.

注

- 1 ここでいう「他者」は「自分以外の存在」を意味し、人物に限定されない。
- 2 ここでいう「身近な人物以外の他者」とは、主としてマンガ、アニメ、小説、TVドラマ、映画などのメディアにあらわれる他者像 (人物像)、あるいは、そのような他者像を含むメディア自体のことである。芸術や自然からの影響についても十分な研究はなされていない。
- 3 ここでいうメディアとは、主としてテレビや書物といった人工の情報伝達媒体とする。そのメディアに登場する人物像やストーリーも含むものとする。
- 4 幼児期と絵本といった研究もあるが、発達段階とメディアが偏っているように思われる。例えば、「青少年とマンガ」といった発達段階とメディアの関係も考えられるが、そのような研究はほとんど見られない。
- 5 中でも、作品中の登場人物や架空のキャラクター、芸能人やスポーツ選手など、具体的な人物像があり、模範や反面教師となり得て、理想の自己像、価値観・行動様式に影響を与えやすいと思われるものを中心に取り上げる。
- 6 例えば、他者の行動とその結果を観察するだけで成立する学習=観察学習 (observational learning)

があるが、攻撃行動、性行動、性役割行動、道徳的行動、向社会的行動、言語行動など、1 個体だけでは成立しない行動や社会的規範に関わる行動などの習得には、観察学習が重要な役割を果たしていると考えられている。

7 詳細は、「子どもとメディア研究会ホームページ」
<http://www5d.biglobe.ne.jp/%7Ek-media/> 参照。〔最終閲覧日 2004/6/13〕

8 同一視は無意識的に生じるもので、意識的になされる模倣とは区別されるが、無意識的であることが、その対象の抽出を困難にしている。

9 「生き方モデル」は、心理学用語と言うより、特に教育の分野を中心に、広く心理学以外の領域でも使われる言葉であるが、ここでの定義は「理想像に影響を与えるような、接近目標としての他者（自分以外の人物モデル）」としたい。

10 理想自己の問題は現実自己との差など適応の問題として発展してきたが、その影響要因よりも内容がどのようなものであるかが研究されてきた。そして概念の細分化から、純粋な願望である理想自己以外に社会的に要求されている義務自己の存在が含まれていることも発見され、近年では接近・回避目標としての正・負の理想自己といった観点から理想自己をとらえる研究が増えており、理想自己を思考することの意味について検討した研究もある。

11 ここでの「マンガ」とは、国際語「MANGA」が意味する「マンガ」であり、いわゆる“漫画本”だけでなく、“アニメ”なども含めたメディア（総体）とする。「漫画」、「MANGA」、「マンガ」という表記について、詳しくは、清水 勲 1999『図説 マンガの歴史』（河出書房新社）参照のこと。

（修士課程）